

アイヌ史研究における史料について

——文献に現われたアイヌ——

THE HISTORICAL DOCUMENTS FOR THE RESEARCH OF AINU HISTORY

Ainu History from the Perspective of Records and Documents

櫻井 清彦*

SAKURAI Kiyohiko

The Ainu people has lived and fostered its own unique culture in the land of Hokkaido, Sakhalin, and Chishima long before the establishment of Japan as a nation. The Ainu culture was gradually developed as a result of long years of interaction with countries of North-Asia continent, and the influence of northward flow of Japanese culture from the North-East region of Japan. However, there remains many question marks with regard to the process of development of Ainu culture. One of the reason for this is that Ainu people did not have a written language, hence, there are no historical documents written by the Ainu people about themselves. Nevertheless, records about Ainu people written by foreigners, including Japanese, can be found in many classical and modern literature. In this report, we will introduce the historical records and documents used for the research of Ainu history.

アイヌ民族は、日本の近代国家成立以前から北海道、樺太、千島において生活し、独自の文化を創造して来た。きびしい自然環境の中で、北アジア大陸の諸文化との長い、密接な交流、また東北地方から北上した日本文化の影響を受けアイヌ文化は成立したと考えられるが、その過程には不明な点が多い。その理由の一つとして、アイヌ民族は文字を持たなかったため、独自の記録がないことによるといわれている。しかし日本人を含む外国人による記録は、日本の古典の中に散見し、さらに近世ともなれば、かなりの記録を見ることが出来る。これらの「文献史料」による民族誌的考察は、今日までアイヌ研究の主軸をなして来たといえよう。またアイヌの風俗を画いた「絵画史料」は、今日の記

録写真と同じようにアイヌ文化研究に貴重である。さらにアイヌ民族の偉大な遺産として「ユーカラ」がある。金田一京助博士をはじめ多くの研究者の努力によって採集され、記録され、それらは優れた文学作品として位置付けられて来た。このユーカラやその分析を通して、歴史史料として幾多の重要な発言を包含しているに違いない。一つの事例としてユーカラやその他の伝承の中に出て来るチャシとチャシに対する考古学的成果との比較、さらには考古学における縄文文化、オホーツク文化、また擦文文化の研究は、アイヌ史、アイヌ文化の成立過程は明確にする分野であった。昨今、「アイヌ考古学」の名称も定着した。

アイヌ史、アイヌ文化の成立過程を明らかに

* 昭和女子大学大学院生活機構研究科教授

Prof., Dept. of Practical Sciences, Graduate School of Practical Sciences, Showa Womens Univ.

するため、「文献史料」「絵画史料」「ユーカラ史料」として「考古史料」について総論的に記述し、わが国における北方史の位置付け、単一でない日本史の認識をアイヌ史の構築によって明確にしたいと思ひ、本稿では先ず「文献史料」をとりあげ、以降、上記史料について拙稿を重ねたい。

(一) アイヌと蝦夷

「アイヌ」という言葉は、文献のうえでは比較的新しいが、「蝦夷（「エゾ」または「エミシ」）」は『古事記』や『日本書紀』などの古代文献に現れる。しかし記紀にみられるこの「蝦夷」は、必ずしも今日のアイヌの祖先と断定できないものがあって、日本古代史の研究で論争の一つになっている。

近世においては、「蝦夷」は明らかに「アイヌ」であったし、また今日の北海道を意味する語であり、文字であった。さらにさかのぼって、平安末期や鎌倉時代においても、「蝦夷」は「エゾ」と読まれ、「アイヌ」のことを意味したと思われる。鎌倉時代の『夫木和歌抄』のなか

えぞがすむ津軽の野べの萩盛りこや錦木の
たてるなるらん（尾張守親隆朝臣）

あさましや千島のえぞのつくるなるとくきの
矢こそひまはもるなれ（藤原顕輔）

などがあるが、これらは北方の異民族を意識したものであろう。

『蔭涼軒日録』の文明十七（1485）年九月二十一日条には、「エゾか島トハ何ト書イタゾト御尋。愚不在由申候」とあって、エゾか島のことを東山殿から蔭涼軒が下問されたことが記されている。「エゾか島」が、「蝦夷島」であることに違いない。

鎌倉時代末期に描かれたという『聖徳太子絵伝』には、太子が蝦夷を引見している図があるが、その蝦夷はアイヌの容貌をしている。

このように平安時代以来、文献を示すところによれば「蝦夷」は「アイヌ」であったとみてさしつかえないだろう。

しかし平安時代以前になると事情は少し違って来る。『日本書紀』神武天皇条の歌謡のなかに、一人で百人にあたるという強い力の「愛瀨詩」が出てくるが、この「エミシ」は『日本書紀』や『続日本紀』にみられる東北地方の住民である「蝦夷」であって、「エビス」、「エミシ」とも称せられている。

一方、「蝦夷」は「毛人」と書いて「エミシ」と読ませる場合もある。蘇我蝦夷のことを、『法王帝説』では蘇我毛人と記し、『日本書紀』敏達天皇条には、「蝦夷」の有力者である魁師綾糟の注に「魁師者大毛人也」とある。しかしこの「毛人」という文字は平安時代初期以後はまったく用いられなくなった。

「蝦夷」という文字、「エミシ」、「エゾ」という呼称がどのようにして生れたかについては、いろいろの考え方がある。

金田一京助は、「エミシ」は樺太アイヌが自分たちを呼ぶ「エンチウ enciw」という言葉が、古代において「エミシ」になり、一方、「エゾ」に関しては、平安時代に「エンチウ」―「エンジュ」―「エゾ」になったと推定し、また「蝦夷」という文字は「蝦」（えび）という字に野蛮人を表わす「夷」をつけたものであると説いた。

喜田貞吉は、文化年間（1804～18）に著わされたという『参考熱田大神縁起』に、「蝦夷」がその自国を「カイ」と呼んでいるという記事があることや、幕末の探検家、松浦武四郎の『天塩日記』に、樺太では「蝦夷」のことを「カイナー」と呼び、天塩地方でも「カイ」という言葉があって、これに中国人が「蝦夷」という字をあて、やがて「カイ」はさらに「アイヌ」に転じたという記事があることから、「カ

イ」アイヌ説を主張している。

このほか「エミシ」の語源に関して、坪井九馬三は、刀剣を意味するアイヌ語のエムシ *emus*¹、新村出は、日本語の弓師から出たものとした。

ところで「アイヌ」の語義には人、男子の意味がある。アイヌコロ *aynu-kor*（尊敬する）、ウアイヌコロ *u-aynu-kor*（互いに尊敬し合う）という語もあって、総じてアイヌという言葉は徳のある者、金持といった、いわゆる長者という意味を含んでいる。

アイヌという言葉の文献上の初見は『諏訪大明神縁起絵詞』に出てくる「万堂宇満伊犬」であって、これは地名として記載されているが、元来は人名に「アイヌ」を付したものであろう。長祿元（1457）年に起ったアイヌの争乱の中心人物は「コシヤマイヌ」、天文二十（1551）年にアイヌの大酋長として役蝦夷に任ぜられた瀬棚の「ハシタイヌ」、實文九（1669）年に争乱を起した「シャクシャイン」などは、いずれも「アイヌ」という語が人名につけられたものである。元来は敬称として、アイヌという語が語尾につけられたものが、やがて賤視を含んで「犬」という文字に置き換えられる場合もあった。『津軽一統志』には、シャクシャインの乱にあたって津軽藩では兵士を松前に送ることになったが、その輸送船の船頭に、万太郎犬、佐十郎犬、林蔵犬などという名称がみられる。菅江真澄の旅行記『外が浜づたひ』にも、津軽松ヶ崎の加武多以武、宇鉄の久摩他可以武の名前がみられる。

金田一は前述のように、「エミシ」の語源を、アイヌみずからを称する「エンチウ」とし、のちに美称の「アイヌ」という語が一般化して「エンチウ」と同義語になり、北海道では「エンチウ」は滅び、樺太でわずかに古語として残るだけとなり、近代にいたって種族名としての

「アイヌ」となったとした。金田一は喜田の「カイ」―「カイナ」―「アイヌ」の説を否定している。

（二）齊明紀の蝦夷

『日本書紀』齊明天皇四、五、六年に阿倍臣の東北遠征の記事がある。この遠征の場所として、秋田、能代、津軽といった具体的な地名とともに、胆振鉏（いぶりさえ）、後方羊蹄（しりべし）、肉入籠（ししりこ）などの、不明の土地も出てくるが、本州北端には違いないとみられる。ここに出てくる「大河」とは津軽の岩木川河口、あるいは石狩低地帯、石狩川などに比定されるが、岩木川河口の十三付近は、早くから開けていたことが考古学上明らかにされているので、この地方に求めることができそうである。

また、この記事に出てくる蝦夷は農耕を知らず、狩猟漁撈の生活をしていること、屋舎のないこと、容貌が和人と異なっていることなどから、アイヌの祖先たちとも思われる。しかしそれ以降の古史にられる蝦夷は、東北地方の諸情勢からして、必ずしもアイヌとは言いきれない。蝦夷のなかには、辺境にあって人種的には日本人であるが、大和朝廷に服従しない者たちと、異人種としてのアイヌの両方が包含されていると思われる。

（三）『諏訪大明神縁起絵詞』とアイヌ

源頼朝の奥州征伐（1189）によって、それまで日本の政治支配の圏外にあった東北地方北部や北海道の歴史が、やや明るくなってくるが、アイヌに関する文献史料はまだ乏しい。

十四世紀の初め、津軽は安東氏一族の争いがもとで、騒然とした事態となり、その余波が道南地方へも波及した。この間の事情の一部が『諏訪大明神縁起絵詞』に記され、同時にアイヌに対する認識がみられる。この絵詞は、延文年間（1356～1360）に信州諏訪上社の執行小坂

円忠によって編纂された絵巻物で、絵は散失したが、詞のほうは現存している。

文中に、蝦夷を日の本、唐子、渡党と三つに類別しているが、齊明紀における 蝦夷 熟蝦夷、津軽蝦夷という分け方に類似している。渡党は日本人に似て、言葉もなんとか通じたということからみて、早く日本人と接触し、同化混血したアイヌだと思われる。他の二者は、言葉も通ぜず、農耕を知らず、日本人と異なるところから、本来のアイヌとみられる。また地名が出てくるが、宇會利鶴子州は、ウソリケシ州で函館の古名、万堂宇満伊犬は松前のことで、津軽外の浜は岩木川河口付近に比定され、津軽海峡の兩岸の地名と思われる。また戦闘の様子も記されているが、毒矢、木幣などのことが書かれており、当時のアイヌの習俗の一部を知ることができる。

(四)『聖徳太子絵伝』とアイヌ

聖徳太子に関する談話、伝承、信仰などは、早くから普及していたが、そのなかで、絵によって太子の伝記を記したものが、『聖徳太子絵伝』である。鎌倉時代から江戸時代まで多くの絵伝が作られたが、茨城県上宮寺所蔵の鎌倉時代末期の作というこの絵には、蝦夷が描かれている。これは、聖徳太子が十歳のときに敏達天皇とともに大和の初瀬川のほとりで、蝦夷の大將綾糟に忠誠を誓わせている場面である。この記事は『日本書紀』の敏達天皇十年三月の記事が基礎になっているが、そこには聖徳太子は登場していないところから、この絵伝は潤色されたものであろう。しかしこれによって、鎌倉時代の絵師が、蝦夷をどのようにみていたかがうかがわれる。数人の武装してひざまずく蝦夷は、目がくぼみ、毛深く、厚司らしい衣服を着ており、また鳥の羽衣をつけ、短弓を持ち、腰に矢筒をつけるなど、アイヌの姿をしている。その顔つきは、当時の唐風の絵巻物『地獄草紙』に

出てくる鬼と酷似しているが、アイヌの姿をこのように理解していたものと思われる。

(五) 近世の蝦夷史料

近世になると、日本人の手による多くの北方史料が刊行され、それに伴ってアイヌに関する記事も増大する。ここではおもな蝦夷文献を紹介する。

寛文九年のシャクシャインの乱をきっかけとして、幕府をはじめ知識人の北海道に対する関心が高まった。ことに水戸藩では探検船快風丸を建造して北方調査に乗出し、石狩川をさかのぼってアイヌに接したが、その記録として『快風丸蝦夷聞書』(1688)などがある。また松宮観山の『蝦夷談筆記』(1710)、新井白石の『蝦夷志』(1720)が相次いで公刊された。『蝦夷談筆記』では、前記シャクシャインの乱がいささか誇張されてはいるが、詳細に記録されている。両者とも本邦最初のアイヌの研究書といえよう。

その後ロシアの南下に伴って、ますます北方の知識を必要とするようになり、十八世紀の末から十九世紀にかけて、北方およびアイヌに関する記録、記事が豊富になった。そのおもなものは次のようなものである。

坂倉源次郎『北海随筆』(1739)、松前広長『松前志』(1781)、平秩東作『東遊記』(1783)、最上徳内『蝦夷草紙』(1790)、村上島之丞『蝦夷島奇観』(1800)、間宮林蔵『東槎紀行』(1800)、村上島之丞、間宮林蔵『蝦夷生計図説』(1823)、間宮林蔵『北蝦夷図説』(1855)。

いずれもアイヌ研究に欠くことのできない文献であるが、ことに『蝦夷島奇観』、『蝦夷生計図説(蝦夷産業図説)』や『北蝦夷図説』は、アイヌの風俗、習慣、生産技術などを詳細に図示したもので、蝦夷絵とともに近世アイヌの実態を如実に反映している。

幕末に、幕府の命によって前田夏蔭の編纂し

た『蝦夷志料』全二一〇巻（1860）は北方に関する一大史料集成であるが、同時に近世アイヌ史料集成ともいいうる。明治以降、同じような形で、『蝦夷風俗彙纂』（1882）が北海道開拓使から刊行されている。また幕末から明治にかけての探検家松浦武四郎の蝦夷日記類にも、アイヌに関する記載がきわめて豊富である。

なお、近世アイヌに関する文献は、大友喜作編『北門叢書』（1942～44）や第三一書房『日本庶民生活史料集成』第四巻（1969）に、そのおもなものが採録されている。

（六）外国文献とアイヌ

中国古代の地誌『山海経』の「海内北経」に「毛民」のことが記されているが、この毛民はアイヌであるという説がある。また『通典』巻二〇〇や『新唐書』巻二二〇『東夷伝』に、唐の貞観十四（640）年、唐に朝貢した「流鬼国」がみえるが、白鳥庫吉はこれを樺太とし、その住民をアイヌとした。その住民は、竪穴に住み、シカ皮、魚皮、イヌの毛とアサを織混ぜた布で着物を作り、雪が積ればスキーに乗って狩猟に出かけ、短弓、骨鏃、石鏃を使用し、また歌舞を好み、死者が出れば遺骸を三年間樹上に置くという。これは近世の樺太アイヌの風習に酷似している。

さらに『新唐書』巻二〇九「北狄伝」や『唐会要』巻九六「靺鞨」にみえる、黒竜江下流に居住する民族、屈説をアイヌとする説もある。元代の文献には、樺太の住民を「骨嵬」、明代や清代では「苦兀」「苦夷」「庫野」「庫頁」などと記されている。これはニヴフ族が、樺太アイヌを「クイ」と呼んだ音訳である。『開原新志』や『遼東志』にも、多毛で、頭にクマの皮を載せ、花模様の布を身につけ、有力者が死ぬとミイラにし、毒矢を用いるなどと記されている。清代の『皇清職貢図』には、着物や肩や背に卍形のアプリケがあるとか、女子は口もとに

入墨をするなどと記されている。

十七世紀に入ると、ヨーロッパ人の記録にもアイヌが現れる。最初にアイヌを観察して報告書に記したのは、イタリアの宣教師アンジェリス Girolamo de Angelis であった。彼は元和四（1618）年、同七年に苦心して北海道に渡った。その報告書には、松前付近のアイヌの体質、衣服、武器、交易、宗教などがかなり詳しく記述されており、体格は日本人よりも大きく、ひげが長く、女は唇や手首に入墨をし、男女とも刺繍の多い木綿衣、厚司を着、武器として弓、毒矢、槍、刀を持ち、舟は樹皮の縄で板を綴じたものとある。

また元和六（1620）年と八年に北海道に入ったポルトガルの宣教師カルワリユ Diogo Carvalho もほぼ同様の報告をしている。

このほか日本の北辺へやてきたオランダのフリース Maerten Gerritsen Vries をはじめ多くの探検家たちの報告に、アイヌの風俗習慣などが記されている。

後記

本稿は『ブリタニカ国際百科事典』に掲載した旧稿を若干の手直しをして再録したものである。